■シリーズ■

中学校武道 ―授業の充実に向けて― ⑩

つまずきをどう克服したか③（ゼロから空手道授業を実施せよ）

セントヨゼフ女子学園高等学校・中学校

三重県津市の市街地から南に車で10分程度に位置するセントヨゼフ女子学園高等学校・中学校。私立の中高一貫校であり、建学の精神を「愛と奉仕の精神に生きる」と掲げたカトリックの女子校である。同校では優れた知性と豊かな感性を育む全人教育を実践し、さまざまな場で活躍するプロフェッショナルな女性の育成に努めており、三重県内でも卓越した女子教育を行う学校として注目を集めている。

そんな同校では、平成27年度より、剣道に代わって県内で初となる空手道の授業を実施した。現在、通年で空手道授業を実施しており、生徒にも好評だという。なぜカトリックの女子校において、空手道の授業を通年で行うようになったのか。空手道を専門とする体育科教諭がいない中、ゼロから始まったセントヨゼフ女子学園高等学校・中学校での空手道授業の実践例を紹介したい。

平成29年9月27日に、取材班はセントヨゼフ女子学園高等学校・中学校を訪問し、同校の空手道授業についてうかがった。

1 空手道授業を女子校で

平成24年度より武道が必修となった。セントヨゼフ女子学園高等学校・中学校では、中学1年から3年生の武道授業は、女子校ということもあり、教員との身体の接触が少ない剣道を実施していた。

剣道授業では、竹刀を全員分60本と防具の必要数40個を学校で購入し、年間で10数時間程度の授業を24年度から26年度までの3年間実施した。

26年度のある日、校長であるシスター斎藤翠は私学校長会出席のため、那覇市の沖縄尚学高等学校・付属中学校を訪問した。その時、同校生徒による空手道の団体形を見学。気合いの入ったかけ声とともに各学年の生徒全員が揃った見事な動きを目の当たりにして、「これだ！」と感じた。「空手の気合いは、本校が目指す〝自己

セントヨゼフ女子学園外観

校長・シスター斎藤翠

実現〟、自ら考え、相手に伝えることができる女性。そのような女性育成のための一助となる。この空手道は是非とも生徒たちに伝える価値がある」と直感。「本校でも空手道の授業を実施しよう」と思い立ち、帰校後すぐに古市藤照教諭たち体育科教諭を校長室に招集した。

シスター斎藤は「空手はグローバルスタンダードであり、日本を紹介するにも非常に優れた伝統文化だと思います。……武道授業で空手はできないかしら」と体育科教諭たちに話を持ち掛けた。

2 ゼロからの空手道授業

シスター斎藤のこの投げかけに、「経験も専門家もいないのに女子校で空手なんて…」と当初は困惑した教諭もいたという。

しかし、これに賛同したのは古市教諭であった。自身は野球が専門であるが、小学生まで糸東流の空手も行ってきた経験がある。

「そういった発想はなかったが、私学なので空手道の授業を行って特色を出すのはいいことである。それに女子が空手をやるのはかっこいい。空手は安全でもあるし、バランス感覚が身につくいい運動。糸東会の先生方の力を借りられれば出来る。やってみる価値はある」。そう思った古市教諭は、体育科の中で話し合った。難色を示していた教員も含めて、安全を第一と考えて、学校体育に合った全日本空手道連盟に加盟している流派の空手を採用しようということで合意が得られ、平成27年度より、まずは1年生において空手道を実施する道筋が作られた。

そして、シスター斎藤より、空手道授業の導入にあたって三つの目標が掲げられた。

1つ目は、空手道を通して礼法を学び、元気で大きな挨拶をする。

2つ目は、高校卒業まで（5年間）に段位を取得し、全員が黒帯を締める。

3つ目は、平成31年の本校60周年記念で空手道の演武を行う。

高校3年生（6年生）は受験等もあり空手道授業を実施しないため、この目標の2つ目にある「高校卒業まで」とは実質5年間ということになる。さらに3つ目の「平成31年」は、平成27年度から空手を始めた1年生が5年生となる年である。つまり、「空手道を実施した初年度の生徒たちが平成31年に初段を取得し、その年の60周年記念行事で演武を披露する」という大きな目標が掲げられたのだ。やるからには徹底して身につけさせたいというシスター斎藤の決意がうかがえる。

5年間での段位取得をするためには、やはり通年での授業でないと難しい。そこで、古市教諭たち体育科は、年間の体育授業計画を見直した。すると1年生から3年生までは週に1回保健の授業が実施されている。しかし、中学校においてそこまで保健の授業を行う必要はなかった。したがってこの時間を空手道の授業に置き換え、通年でおよそ30時間を空手道に確保することができた。

やるからには本物に触れさせたい。そう思った古市教諭は、知り

合いの糸東流空手道（糸東会）の師範に相談し、授業協力者として同会で津市在住の伊野匠氏に指導してもらえることが決定した。しかし、通年での授業となると伊野氏1人が全ての時間で指導することは困難となる。伊野氏は、「セントヨゼフからこんなにいい話をいただいた。これは県内の空手道連盟にとってもありがたいことである。なんとしても成功させねばならない」と感じ、授業に穴を空けないように他の指導者とも相談して、5名の授業協力者の派遣を調整。うまくシフトを組み、授業で指導を行うことを決定した。当時、公立の学校での空手道導入は難しく、三重県内で空手道授業の実施校はゼロであった。まずは私学から県内での空手道授業の採用をと伊野氏たちは強く願っていたのである。

教員たちも平成26年から平成28年にかけて、香川で2月に行われた全日本空手道連盟主催の講習会や、日本空手道会館で8月に行われている日本武道館と全日本空手道連盟主催の研修会を受講し、その後、初段を取得。授業での万全を期した。

第２学年授業（鵜崎麻里子氏による全体指導）

第３学年授業①（伊野匠氏と鵜崎氏による全体指導）

3 授業の実践

平成27年度より1年生で開始された授業では、「はじめに演武をみせないと生徒はどんなものだかわからない」と伊野氏は考えて、糸東流のアジア大会で優勝、全国選抜で準優勝の田中優妃選手（当時中学2年生）に形の演武を依頼。田中選手は見事な形を披露した。

平成28年度には1年生と2年生で、平成29年度には1・2・3年生で、毎週水曜日に年30時間実施されている。

内容としては、空手道の基本の動作に加えて、平安初段から平安五段とセイエンチンの形演武を実施している。伊野氏は授業では差をつけてはならないと考え、競技会は行ってはいないとのことだ。1年生は、立ち方や突き方など基礎ができていないため、クラス単位で教員1名と授業協力者1名により実施。2・3年生は教員2名と授業協力者1名により、学年ごとおよそ80名で実施しているという。

第３学年授業②（基本の蹴りの指導）

第３学年授業③（セイエンチンを練習する生徒たち）

また、「本物に触れる」という趣旨のもと、授業では体育着ではなく、空手衣を着用。保護者もその趣旨に賛同し、各家庭で空手衣を購入してもらっているという。「道着を着るときっと気持ちも引き締まるでしょ。やるからには徹底しないとね」。シスター斎藤は笑顔でそう答えた。

取材では5限目と6限目を見学。それぞれ、2年生と3年生の授業が行われていた。2年生は緑帯（7級）、3年生は紫帯（5級）をそれぞれ着用。級ごとに色が変わっており、最終的には黒帯を目指している。

授業は黙想から開始される。シスターからは「生徒たちは、朝は主の祈り、帰りはマリア様に『アヴェ・マリア』をお祈りします。それは黙想に通じますよね」と説明が加えられた。

授業では伊野氏に加えて、鈴鹿市の鵜崎麻里子氏が授業協力者として指導。伊野氏同様に国体への出場経験がある実力者である。女性が指導者として加わっていることは生徒たちの安心感に繋がっているという。基本の突きや蹴りの後、2年生の授業では平安五段、3年生の授業でセイエンチンの形指導がなされていた。伊野氏と鵜崎氏が壇上にあがり、80数名の生徒を一斉に指導。生徒たちは大きな声を出すことを心がけ、一つ一つの動きを丁寧に行っていた。

授業では専門用語の猫足立ちなど空手道特有の用語も交えながら指導。これは通年授業であるからこそできることである。

3年生による基立（もとだ）ちからの蹴りの練習では、鵜崎氏より「自分のお腹の前にまっすぐ足を上げてください」と注意点があげられる。各技の練習では随時具体的な注意点があげられ、生徒たちは反復練習を行う。反復練習では複数の教諭（この日は3名）により、個別指導がなされていた。授業の後半の15分間ではセイエンチンの練習。途中混乱も生じていたが、一つ一つの動きを伊野氏が見せながら説明。授業で行うには難易度の高い技をなんとかものにしようと、真剣に反復を繰り返す生徒の姿が印象的であった。

授業の評価は、指導者の採点を参考にして教員が礼法、立ち方、形などの観点から総合的に判断している。また、空手道を行っていない4年生以上の上級生たちは羨ましがっているという。

▽生徒の感想

◎2年生

「この学校では、はじめから空手道の授業があり、勉強になるし、毎週楽しみです。帰宅後、動画を見て復習をしています。また、バレエを3歳からやっており、身体は柔らかいので空手でもしっかりと動けます。空手の授業後は、他の授業でもしっかりと集中できます」

◎3年生

「空手では四股立ちなど太腿を使った動きがありますので、身体が柔らかくないといけません。次は蹴りをしっかりとできるようにしたいです」

◆指導者の感想

◎鵜崎麻里子氏

「普段の道場の指導とは異なります。授業では個人ではなく、集団で同じようなレベルで行いますので、指導していくのは難しいですね。なるべく分かりやすい指導を心がけております」

◎伊野　匠氏

「女子校なので護身術にもなるような動きも取り入れております。道場とは違い、ここでは生徒に怒らずにポジティブに直すように心がけています。生徒たちはいい子ばかりなので、よく言うことを聞いてくれます。一番大事なのは安全に行って、けがをさせないことですね。課題としては、応用に入る時間が少ないことです」

◆教員の感想

◎野呂博子教諭

「授業では、指導者の方のアシストをしながら、体調が悪い生徒がいたら、サポートするようにしています。体育は苦手であっても空手は好きという生徒もいます。生徒は毎年昇級審査を受けますので、それがステップアップとなり、やる気に繋がるのだと思います」

4　海外研修などでの演武披露

セントヨゼフ女子学園では、国際教育の一環として、海外研修を行っている。1年生は台湾研修、2年生はニュージーランド研修、3年生はロサンゼルス研修、4年生はカナダ研修がいずれも3月の春休み中に、5年生はフィリピン研修が8月中旬にそれぞれあり、1年生はスーパーアドバンスコース生全員を対象とし、2～5年生は希望者が研修に行っているという。

ニュージーランドでの形演武（平成29年3月）

昨年度、2年生のニュージーランドでは10日間の研修におよそ60名の生徒が参加。研修最後の日には、お世話になった地域の方々を集めてサンキューパーティーが行なわれた。その中で生徒たちは空手の形演武を披露。これには現地の人々は大変驚き、また大いに喜んだという。先ほどの3年生にこの件について聞いてみた。

「私は演武をサポートする立場でしたが、演武が終わるとホストファミリーに大変よろこんでいただき、本当に嬉しかったです」

今年度は、3年生がロサンゼルスで演武を披露するという。これはシスターがおっしゃった「空手はグローバルスタンダードであり、日本を紹介する非常に優れた伝統文化」に当てはまる。また、教育基本法に盛り込まれている「伝統と文化の尊重」にも合致する。この他に保護者会、私学校長会でも演武を披露しているという。

5　まとめ

「セントヨゼフ女子学園が目指すのは、“Women for Others”です。人々に幸せを届け、それによってもっと大きな幸せをいただく女性です。空手道の他者への気遣いはそれに通じると思います」。シスター斎藤はこうおっしゃった。

また、シスターは生徒たちの自己実現のためには、身体で感知できる知恵とそれを獲得するための困難が必要であると考えている。空手の授業では、生徒ははじめに技名を覚え、夏の暑い日も真冬であっても、その技を何度も反復練習する。身体で感知できるように訓練していくのだ。生徒からは「夏の空手衣は暑くて嫌だ」などの声もあがるという。シスター斎藤が目指す教育が空手道を媒体として行われている。

課題としては、4年生から通年で保健の授業が入ってくるため、3年生まで空手にあてていた時間を保健にしなければならない。従って通年での空手の時間をどのように設けるかが問題とのことだ。生徒たちの声はまだまだ小さく、しっかり気合いの入った声を出すことが今後も目標だ。そしてそれを生活の中に繋げていけばとシスターは考える。

全人教育を目指すカトリックの女子校において、縁あって演武を見学した校長が空手道の導入を決定し、それに賛同して体育科教諭が尽力。空手道の普及を考える指導者の協力を得ながら実施されている空手道授業。

話を伺っているうちにカトリックの女子校において通年の空手道授業を行うことに違和感を覚えなくなっていた。むしろ、そのような中学校だからこそ、日本の伝統文化に重点がおかれて、それを生徒も受け入れている。そして、武道教育には様々な状況でも応じられる普遍的価値がある。肌身でそのことを感じられた取材であった。セントヨゼフ女子学園での空手道授業の発展を願いたい。

（文＝長澤克成、写真＝横内裕史）

杉江正敏（すぎえ・まさとし）
写真と記事でたどる
武道の近代史

月刊『武道』1999年1月号から2001年3月号までの27回連載をまとめた杉江正敏先生のライフワーク

明治以降出版された諸雑誌の記述から、武道を取り巻く日本文化や、体育・スポーツ全般にわたる内容を掲載した記事を紹介する形で、武道がどのように近代化へと歩みを進めてきたのかを明らかにするための基礎資料集。

※本書は非売品のため、書店では取り扱っておりません。日本武道館出版広報課に直接お申し込みください。

杉江正敏先生の略歴

1946（昭和21）年 12月11日　岐阜県不破郡垂井町に生まれる
1969（昭和44）年　東京教育大学体育学部体育学科卒業
1971（昭和46）年　同大学大学院体育学研究科修了
　同年　同大学教務補佐員
1975（昭和50）年　大阪大学助手
　以後　同大学講師、助教授（准教授）、教授に昇格
2010（平成22）年　同大学定年退官
2016（平成28）年7月6日　逝去。享年70

B5判・182頁・
頒価1000円+税
（送料含む）

目　次

第1回　連載をはじめるにあたって
近代武道史研究の意義／私の研究の整理／明治期における武道の社会的評価／武道とスポーツ／学校教育と武道／戦時体制下の武道
第2～12回　『風俗画報』にみる明治期の武道
『風俗画法』について／江戸趣味・懐古・故実にみられる武術／各地、名所図会にみられる武術／武術の興行と講習会への移行について／外国人歓迎行事や博覧会の協賛行事と武術の競技化の進行／明治二十年代以降にみられるナショナリズムの風潮と武道教育／日露戦争と武道の評価／武士道と武道の問題／補遺およびまとめ
第13～20回　『体育と競技』・『アサヒスポーツ』の両誌にみる武道のあゆみ
武道の教育化の進展と名称変更／昭和六年の武道必修化への経過について／武道の競技化の進行とスポーツ／御大礼記念天覧武道大会／体育の日本化の進行と武道教育／「非常時日本」と武道
第21・22回　『体育と競技』・『アサヒスポーツ』の両誌にみる武道の国際化のあゆみ
第23回　『体育と競技』誌に見る日中戦争期の武道教育のあゆみ
第24回　『学校体錬』・『学徒体育』両誌にみる戦時体制下の武道教育について
第25・26回　『新武道』誌にみられる戦時体制下の社会における武道について
最終回　戦後の武道のあゆみ
学校武道の禁止と大日本武徳会の解散／武道のスポーツ化と学校武道の復活／武道から格技へ／格技から武道へ
杉江正敏先生の略歴と主要業績

編集・発行　公益財団法人日本武道館
〒102-8321　東京都千代田区北の丸公園2-3
ホームページhttp://www.nipponbudokan.or.jp
お問い合わせ・ご注文は日本武道館出版広報課までどうぞ！
TEL03(3216)5147
FAX03(3216)5158